

広野町二つ沼総合公園グランドオープン、パークフェス（5/3）開催報告書

認定NPO法人 JKSK 女性の活力を社会の活力に
いわきおてんと SUN 企業組合

2013年、14年とJKSKは、いわきおてんとSUN企業組合ならびにNPO法人ザ・ピープルと連携し、オーガニックコットン栽培プロジェクトの応援のボランティアバスを運行してきました。その過程で出会った福島県広野町の皆さまと一緒に汗を流し、意見交換等を通じ、様々な課題や可能性についてお聞かせいただいております。

2015年、JKSKは首都圏の団体やいわき、広野の団体と連携し、町民の帰還が半数程度にとどまる中、賑わいや仕事を創出し、女性や子供たちが安心して楽しく暮らせる広野町を取り戻せるよう応援プロジェクトを実施することとなりました。ボランティアバスの運行（3回）、車座交流会の開催、そして2015年春に再開された「二つ沼総合公園」や、今年度末に造成が完了する防災緑地、有機綿畑などを拠点に、交流や綿・果樹の6次化に着手し、賑わいと仕事を創出し、町民帰還とともに、双葉八町村の復興の加速を応援します。

その一環として5月3日、5年ぶりに再開した「二つ沼総合公園」にて、いわきパークフェス実行委員会の協力を得て、パークフェスを開催いたしました。

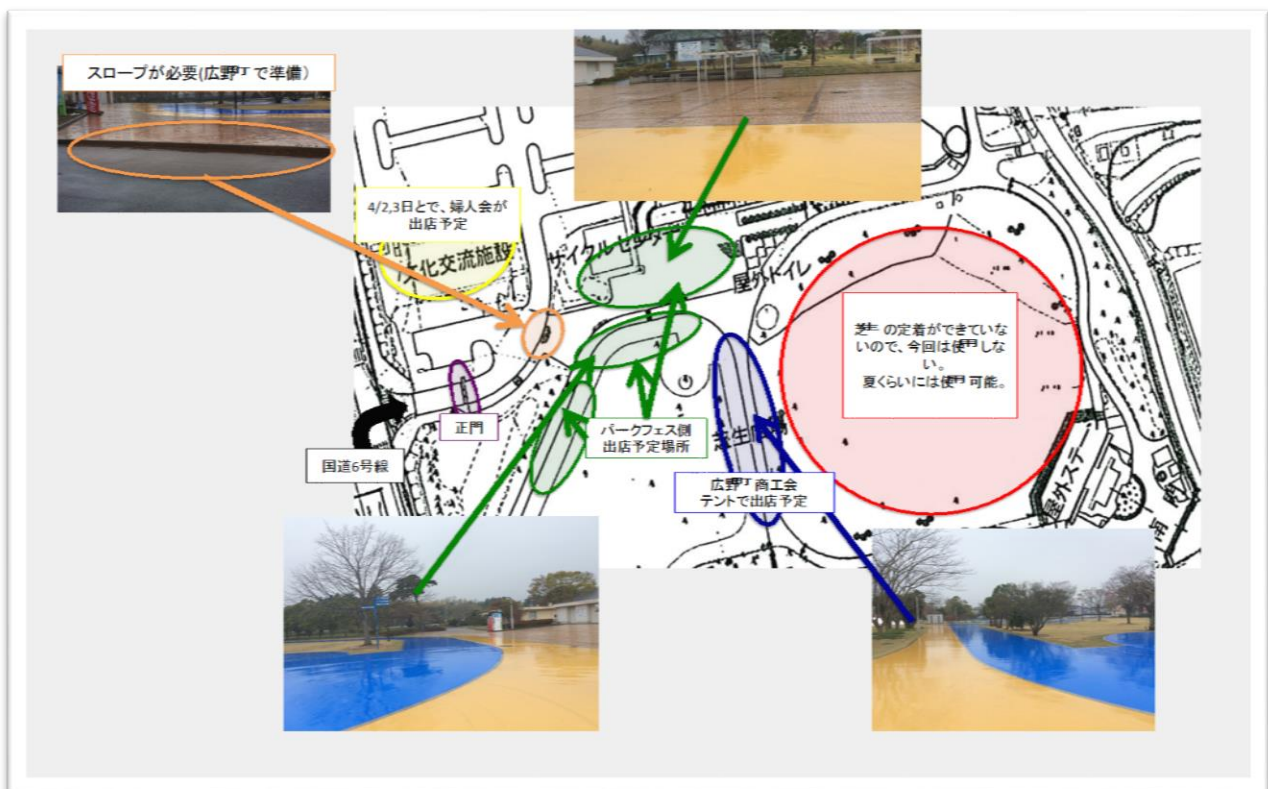
開催日時：5月3日 10:00～15:00 天気：快晴

開催場所：広野町二つ沼総合公園

出展者数：広野町商工会（7店舗）、いわきパークフェス（18店舗）

来場者：約 3,000人

全体レイアウト図





<開会セレモニー>

広野町長、各議員さんの挨拶に始まり、メディア関係者も多く詰め掛けてのセレモニーとなりました。



<広野町商工会のブース>

商工会側のブースは地元野菜を始め、主婦グループによる手作り雑貨、焼きそば等の飲食関係が出展しました。



<パークフェスのブース>

パークフェス（いわき）側の出展はケータリングカー方式で手作り雑貨、飲食関係 18 店舗が出展しました。



<再エネ電源車「おてんと号」>

公園中央にじゃぼん玉マシーンを設置、ザ・ピープルが広野で栽培するコットン事業の紹介の他、いわきおてんと SUN 企業組合が「おてんと号」で電源供給と音響設備を用意しました。



＜遊具で遊ぶ子供たち＞

原発事故対策の最前基地になった為に、4年間使えなかった二ツ沼総合公園に子供達や家族連れが集まり、震災前の賑わいを取り戻した1日となりました。

子供達の歓声を聞いて、涙する町民も居り、復興に向けて意義あるイベントとなりました。



＜大道芸も人気＞

パークフェスで人気の大道芸人、子供達向けに風船のパフォーマンスを演じ、使用した風船を配る時には、子供達の更に大きな歓声が湧きました。

＜家族連れでにぎわう公園＞

お昼時間頃には来場者も増え、飲食コーナーには人が並ぶほどの盛況ぶりとなり、主催者発表では3,000名の来場者が集いました。



＜遠藤町長と出展者＞

広野町遠藤町長は、足の怪我で松葉杖の状態でありながら、出展者全てを回られ、全ての店舗で買い物をされ、感謝の言葉を述べて回られました。

<まとめ>

震災及び原発事故の影響により避難区域となり住民の姿が見えなかった広野町、その後の除染により住民の帰還は始まったものの、その数は原発事故前の半数に止まる広野町。特に子育て世代の帰還が少なく、戻った住民の半数以上が高齢者です。

反面、除染作業や復興工事の為に作業員が町内の作業員宿舎に寝泊まりをし、表向きには震災前の住民数が暮らす町になっていますが、元のコミュニティではなく、子供の声が聞こえない異常な状態である広野町です。

今回、グランドオープンした二つ沼総合公園は、原発事故前にはその多様な遊戯施設が人気で、いわき市や南相馬から多くの家族連れで賑わう公園でした。グランドオープンでは役場職員も、当日の賑わいを見て「子供の声が溢れ、涙が溢れた」と言われるほどの復興に向けての大きな一歩になりました。

その後、いわきで毎月開催しているパークフェスに、広野町として出展をされる等の交流も生まれています。継続して広野町でパークフェスを実施していくことにより、賠償金問題等により引き裂かれたコミュニティの再生につながるだけでなく、いわきの若者や女性と広野町帰還住民との交流・連携が広野町の復興を加速し、その事例が今後帰還を予定している檜葉町、富岡町の復興において良い先事例となることを期待します。

※次回、8月の花火大会にて連携開催を予定